

武蔵野日曜集会

見非

——ヨハネ伝第9章35～41節——

1995年1月29日

小池辰雄

自己義認 無者キリスト 賜った無 靈止^{ひと} キリストに圧倒される 見非 絶対否定 無即無
限無量 無の実存

【ヨハネ9・35～41】

³⁵ イエスその追い出されしことを聞き、彼に逢いて言い給う『なんじ人の子を信ずるか』³⁶ 答えて言う『主よ、それは誰なるか、われ信ぜまほし』³⁷ イエス言い給う『なんじ彼を見たり、汝と語る者はそれなり』³⁸ 爰に、かれ『主よ、我は信ず』といいて拜せり。³⁹ イエス言い給う『われ審判^{さばき}の為にこの世に来れり。見えぬ人は見え、見ゆる人は盲目とならん為なり』⁴⁰ パリサイ人の中イエスと共に居りし者、これを聞きて言う『我らも盲目なるか』⁴¹ イエス言い給う『もし盲目なりしならば、罪なかりしならん、然れど見ゆと言う汝らの罪は遺れり』

●自己義認

³⁵ イエスその追い出されしことを聞き、彼に逢いて言い給う『なんじ人の子を信ずるか』

「人の子」という言い方は旧約聖書に出てくる。ダニエル書7章13節に、

「¹³ 我また夜の異象^{まぼろし}の中に観^みてありけるに、人の子のごとき者雲に乗て来り日の老たる者の許に到りたればすなわちその前に導きけるに、¹⁴ 之に権と栄と国とを賜いて諸民、諸族、諸音^{いん}をしてこれに事^{つか}えしむ。その権は永遠の権にして移りさらず又その国は亡ぶることなし。」（ダニエル7・13～14）

これは素晴らしい預言です。キリストの神の国の預言です。ダニエル書というのは預言書の中に入っているけれども、いわゆる預言書ではない。これは非常に黙示録的な内容です。ダニエルというのは本当に物語みたいな人物です。火の燃える穴に放り込まれたけれども、火が燃えつかなかったという。

ヨハネ伝9章13節から読みますと、

「¹³ 人々さきに盲目なりし者をパリサイ人らの許に連れきたる。¹⁴ イエスの泥



をつくりて其の人の目をあけし日は安息日なりき。¹⁵ パリサイ人らも亦いかにして物見ることを得しかと問いたれば、彼いう『かの人わが目に泥をぬり、我これを洗いて見ゆることを得たり』¹⁶ パリサイ人の中なる或人は『かの人安息日を守らぬ故に、神より出でし者にあらず』¹⁷ 爰にまた盲目なりし人に言う『なんじの目をあけしに因り、汝は彼に就きて如何にいうか』¹⁸ 彼いう『預言者なり』¹⁸ ユダヤ人ら彼が盲人なりしに見ゆるようになりしことを未だ信ぜずして、目の開きたる人の両親を呼び、¹⁹ 問いて言う『これは盲目にて生まれしと言う汝らの子なりや、然らば今いかにして見ゆるか』²⁰ 両親こたえて言う『かれの我が子なることと盲目にて生まれたる事とを知る。²¹ されど今いかにして見ゆるかを知らず、又その目をあけしは誰なるか、我らは知らず、彼に問え、年長けたれば自ら己がことを語らん』²² 両親のかく言いしは、ユダヤ人を懼れたるなり。ユダヤ人ら相議りて『若しイエスをキリストと言ひ顯す者あらば、除名すべし』と定めたるに因る。²³ 両親の『かれ年長けたれば彼に問え』と云えるは、此の故なり。²⁴ かれら盲目なりし人を再び呼びて言う『神に栄光を帰せよ、我等はかの人の罪人たるを知る』²⁵ 答う『かれ罪人なるか、我は知らず、ただ一つの事を知る、即ち我さきに盲目たりしが、今見ゆることを得たる是なり』(ヨハネ9・13～25)

パリサイ人のユダヤ人はキリストのことを「罪人」なんて、とんでもないことを言っている。このパリサイという連中はイエスを受けとらない。

「新興宗教のけしからんやつだ」

と、それくらいに思っている。パリサイというのはモーセの律法を金科玉条にしている連中です。モーセを最大の預言者だと思っている。自分たちはそのモーセの律法をちゃんと守っている立派な人間だと自己義認している。自らを義としている。自らを義とし、自らを義としているのをパリサイ根性という。そして、人を批判する。これはとんでもない。

●無者キリスト

キリストは決して自分を義しとなさらなかった。

「我、何事も為しあたわず。私は何も自分で教えているのではない。神さまが言えということ言つて、神さまが為せということをしているだけのほしだ」

と。だから、私はキリストのことを「無者」といつている。我が無いひとです。無我者、無者。キリストのことを

「無者キリスト」



と言う人は他にいないでしょうね。一般の教会の悪口を言うわけではないけれども、本当にキリストを受けとつてないんだ。私は何かもつたいぶつたのは嫌いだね。イエスは神一切で生きたひとです。自分が無い。本当に無私なんです。無我、無私のひと。だから、

「我を見しものは父を見しなり」

と言えた。自分がゼロだから無限大が入ってきたから、

「私を見た者は父なる神――無限大なる神――を見たということになる。自分は神の現象体だ」

と。神の本当の現象体になるには、自分が無いこと。我々が本当にクリスチャンというならば、我が無い。

自分では「我が無い」という悟りの世界には入れない。禅宗の悟りは、それ自身では悪くはないけれども、まだ自分という者を相手にしている。禅宗の本当の悟りの世界に入っている人は、

「悟るの悟らないのいうことは言う必要はない。悟ったと思ったのは本当は悟っていない」

と言います。

よく「信仰、信仰」というけれども、

「私は信仰なんかない。信じ仰ぐなんて、そんな世界ではない。キリストに圧倒されて生きている」

と。それだけのなしだ。

「自分の側はどうだ」

と、そんなことを考えている必要がない。だから、自分で

「信仰がどうだ、まだ自分の信仰が足りない」

とか、そんな考え方は本当は相対的な世界であつて、ダメなんだ。

●賜った無

それでは、「無」とは、悟つて無となつたか。そうではない。私の無は賜った無なんです。キリストから賜った無です。無我という境地をイエスが私にくださった。それを受けとるだけのなしです。平伏して、

「ありがとうございます」

と言うだけのなしです。相対的な人間小池は罪びとにすぎない、ガタガタな野郎です。そんなものは自分で相手にしたつてしょうがない。そんなものは問題にしない。普通の道徳の世界では自分を問題にする。まだ修養が足りない、まだ勉強が足りない。相対の世界が悪いといひません。けれども、それでは本当の世界に入れない。

何も悪口を言うわけではないけれども、一般の教会の信仰というのは、まだお体裁がず



いぶん多い。そんな体裁の世界ではない。

「私の信仰は……」

なんて、まだ思っているうちはダメなんだ。キリストに圧倒されて生きている。その力に、その光に、その愛に、その生命に圧倒される。それだけの人はなしだ。だから、力が来てしようがない、光が来てしようがない、生命が来てしようがない。そういうわけです。そういう告白の他に何も無い。

「自分の信仰がどうだ、自分の行為がどうだ」

なんて、顧みていたってどうかなるか。五十歩百歩だ。いわんや、人のことを考える必要はない。

「人の信仰がどうだ」

なんて、人の信仰のことを考えることは何もない。みなそれぞれで結構です。

「人は人なり、我は我なり」

と、これは哲学者の西田幾太郎先生が言った。

「人は人なり、我は我なり、自分は自分の道を行くんだ」

と。西田先生は福音の世界をちゃんと受けとっているね。だから、凄いです、いわゆるクリスチャンではないけれども。徹しているかたです。西田さんはそこの哲学者と違う。

仏道でもいいですよ。私は「仏教」とか「キリスト教」とか、「教」という言い方は嫌いだ。教えではない。道なんだ。道というのは、自分の足で歩かなければ道にならない。我々は道人である。老子が

「無道の道」

と言ったでしょ。孔子が

「老子には自分とはとてまかなわれない。彼は竜のごとし」

と言った。シナ人は竜という霊的な動物を非常に尊重する。竜人なんだ。私たちが中学時代には、大いに孔子の道徳というものを尊んで学んだものです。けれども、孔子の世界は――ウソではないけれども――まだ相対性がある。老子になると、絶対の世界に入る。だから、「無道の道」なんていうことを言う。

「これが道である」

と言って、限定したらだめだということです。道なんかない。そこに本当の道がある。

無道の道を歩いているものがある。何ですか。空を飛ぶ鳥です。鳥は無道の道を歩いている。空には道がない。鳥は翼でもって風に乗って自由自在に動いている。鳥の動いている世界は、あの鳥の姿は素晴らしい。翼は全く風に乗っかって自由に動いている。鳥の姿は本当の無道の道なんです。水の中の魚もそれに近い。

魚が水から上がってきて歩きだした。人間のもとはそういうわけだなんていう。始めは、猿のように木によじ登ったりしたんだな。人間は段々それができなくなつて、四つ足が二



つ足になってしまった。その代わり、人間は前の足でものを書いたり、いろいろなことをするようになった。手は前足だからね。人間というのは不思議なものだ。

● 霊止^{ひと}

本当の人間は神の霊をいただいている。これを「霊止^{ひと}」という。神霊がその中に止まっているのを霊止という。我々が「ひと」というのは、こういう霊止^{ひと}でなければダメです、キリストの霊がその中にとどまっているような霊止。止まっていなかったら、クリスチャンなんて言ったって、それは観念クリスチャン、名ばかりのクリスチャンです。パウロは、「我はキリストと一つなり。キリストわがうちに、われキリストのうちに」と言った。あのパウロは本ものです。一つになること。

「私はキリストを信じています」

なんて、「信じている」なんていうのはダメなんです。

「私はキリストと一緒に生きています」

と、これが本当の世界です。

「キリストを信じてなんかいませんよ、一緒に生きているんですよ」

と、そういうことをはつきりと言わなければ、本当のクリスチャンではない。偽^{にせ}とは言わないけれども、観念的なクリスチャンがいつぱいいるわけだ。

私の無教会——内村鑑三の流れ——のときはまだまだ観念的なものでした。全部が観念とは言いませんけれども、観念性が非常に多い。内村先生自身は観念の非常に少ないかたでした。だから、内村先生の書いたものには力がある。頭で書いてない。私が直に自宅の集会に出かけて行って承った藤井武先生もそれに類する。内村鑑三、藤井武。それからいわゆる教会の世界では賀川豊彦、これは本ものです。賀川先生は実践的な意味で一番本ものです。まだ、内村・藤井というのは、語っている世界が多いけれども、賀川さんは本当に実践的なかたで、どん底を歩いた人だ。私は、その意味において賀川さんを一番尊敬する。賀川さんの自伝を読んで、私は目でなくて魂において涙を流した。魂の涙です。

聖霊の光でものを見てみると、不思議な見かたができる。教会史の読み方が違ってくる。大体、「教会」という言葉がおかしい。「エクレシア」というのは「神に呼ばれた人たちの群」ということです。「キリスト教会」なんて、もう熟した言葉になってしまっているけれども、本当は教えの会ではない。だから、内村先生は

「教会の中には入らない」

と言って、「無教会」と言い出した。しかし、無教会がまた一つの派みたになってしまったら、これまたダメだ。「無教会主義」なんて、主義になったらダメなんです。観念でもって限定されている世界はダメです、無限定の世界でない。

やはり、そういうところでは、大詩人ゲーテなんかはでつかい。ゲーテという人は説明



したらダメなんです、逃げてしまう。つかめない。説明でつかめるような存在は大したことではない。ドストエフスキーもそうだ、トルストイも。第一流の人物、あるいは超一流の人物は説明はできない。現物を読んで身読する。だから、私は研究会なんて嫌いだ。研究なんかして掴める世界ではない。身読会です。からだで読め、身読せよ、全存在で読めということです。

●キリストに圧倒される

ヨハネ伝9章に戻ります。

³⁵ イエスその追い出されしことを聞き、彼に逢いて言い給う『なんじ人の子を信ずるか』³⁶ 答えて言う『主よ、それは誰なるか、われ信ぜまほし』³⁷ イエス言い給う『なんじ彼を見たり、汝と語る者はそれなり』³⁸ 爰に、かれ『主よ、我は信ず』といいて拝せり。

「分かりました」ではなくて、「信ずる」と言った。この「信ずる」という言葉がまた躓きになる。「信ずる」のではなく、「信ぜしめられた」という受け身なんです。我々の側からの「信ずる」なんていうものは当てにならない。否でも応でも信ぜしめられる。

「私はキリストを信じてます」
なんてのはダメだ。

「私はキリストに圧倒されています。その生命に、その光に、その愛に圧倒されています。だから生きています。だから生きています」

というだけのはなしです。これは本当の世界ですよ。だから、力が来てしょうがない、ありがたくてしょうがない。こちら側から信ずるの何のかんという、人間の側からの言葉はみなダメです。上からの受け身で、

「キリストは私を圧倒しています。キリストに圧倒されて生きている。この力は、この光は、この愛は、この生命は何ものとも変えられません」

と、こういうわけです。そのような烈々たる力に圧倒されて生きているクリスチャンが幾人いるでしょうかね。相対的人間小池は躓いたり転んだりしてますよ。けれども、その根源は絶対に他のものでやつつけられるようなものではない。

「千万人といえども我ゆかん」

と孔子が言ったけれども、それは本当はこの世界に入ると言える。天下無敵なんです。もう全然、敵が無い。天下無敵の本当の意味は、自分が天下無敵に強いのではない。

「もう敵なんかありません、全部包摂しています。キリストの力で、キリストの愛で、キリストの生命で、キリストの光で、全部包摂してしまっているから、敵なんかありません。それが中国人であろうと、ロシア人であろうと、どこ人であろうと、全部、兄弟姉妹です」



ということです。本当の兄弟姉妹というのは、そういう境地から出てくる。どこへ行っても、本当に握手ができる。

ドイツでは、買い物をする、と、相手が女の人であろうと、男の人であろうと、「アウフビーダーゼー」またお会いするまで」

と言って握手してきよならする。「さよなら」というのは「さらば」といって、諦めの言葉だね。ところが、ドイツ語は

「再会を期して」

という言葉なんです。これはいい言葉だ。

「さようなら」

というのは諦めの宗教だ、

「さらば、やむをえず。それでは仕方がないからお別れしましょう」
なんて。これは仏教的なあきらめの世界だ。

私は今、詩を書いているけれども、私の詩は完成しない、終り無き詩なんです。完成したら、「それでおしまい」

ということ、お終いの世界だったらダメなんです。終りの無いこと、シュューベルトの「未完成交響楽」みたいに。

●見非

38 爰に、かれ『主よ、我は信ず』³⁸ といいて拜せり。39 イエス言い給う『われ
39 審判の為にこの世に来れり。見えぬ人は見え、見ゆる人は盲目とならん為なり』

大体、「見ゆる」ということは何か「自分ができる」ということと同じことです。何か自分ができると思っている。それは相対的にはできて結構ですよ。相対的には見えて結構なんだが、本当の意味では見えてないということ。

「私は何も見えません、何もできません」

というのが、本当の無の立場なんです。『ファウスト』の始めの方に、

「はてさて、俺は哲学も法学も医学も、あらずもがなの神学も熱心に勉強して、底の底まで研究した。そつしてここにこうしている気の毒な馬鹿な俺だなあ。そのくせ何もしなかった昔よりちっとも偉くなっていない。マギステルでござるの、ドクトルでござるのと学位倒れで、もつかれこれ十年の間、つり上げたり引き下ろしたり、縦横十文字に学生どもの鼻頭をつまんで引き回している。そして、俺たちに何も知られるものでないと、俺は見ているのだ。それを思えば、ほとんどこの胸がこげそうだ。もちろん、世間でドクトルだマギステルだ学者だ牧師だという、一切の馬鹿者共にくらべれば、俺の方が気はきいている。俺は疑惑に悩まされるようなこともない。……」

とある。とにかく、知るの知らないのということ——今日の題に



「見非」(見ゆるに非ず)

と書いた――我々が何かものが見えるとかできるとか、そういった相対的なものは、それは悪くはないけれども、それではいつまでたつても始まらない。

「私には何もできません、何も見えません」

という無の世界が大事です。我が無い。それは、禅宗的な悟りでなれないことはないけれども、そうではなくて、我々は福音的にキリストから無をたまわった。我無き世界を賜っている。これを「罪の贖い」というんです。「罪」というのは「自我」が罪ですから。

「自我は私が全部、十字架で引き受けたよ。十字架でお前の罪は全部引き受けた。

そして、聖霊を与える」

という。だから、十字架と聖霊は、その恩恵の土台と屋根です。キリストの十字架を抜きにして、「聖霊、聖霊」と言つたつてダメですよ、十字架が土台ですから。この十字架で我がすつとばされているんだから。

「お前の自我は全部、この十字架で私が引き受けた。そうしたら今度は、お前に聖

霊の素晴らしい生命の世界を与える、光の世界を与える、愛の世界を与える」

と。これがこの十字架と聖霊なんです。正に円現する。聖霊の世界は形でいうと、円現です。

●絶対否定

十字架・聖霊ということ。キリスト教で

「十字架、十字架」

と普通は言っている。聖霊がさっぱり出てこない。今度は

「聖霊、聖霊」

と言って、十字架をさっぱり言わないのがある。どっちもダメです。十字架の土台に初めてこの聖霊の円現が出てくる。「十字架・聖霊」は不可分、不可離です。これが我々の本当の信の世界です――「信仰」という言葉は嫌いだけれども、仕方がない――これが本当の信仰なんです。本当のうつつの世界、霊現の世界、霊的なうつつの世界です。

「私には何も見えませんが、何もできません」

という絶対否定の相です。キリストの光に照らすというと、そうなんです。そして、御前みまえに平伏ひれふしている。

無という境地は平伏しの意味です。そうすると、キリストは聖霊を与えて立たせてくださる。キリストの力に圧倒される。圧倒されて生きている。私は信仰なんかもってない。そんなものは考えてない。ただキリストに圧倒されて生きている。それだけだ。凄いのは、キリストが凄い。

「神に栄光を帰せよ、キリストに栄光を帰せよ」

ということ。



「私は信仰も何ありません、ただキリストに圧倒されて生きていますよ」と、普通のクリスチャンでそういうことが言えるのがいるかというんだ。あなた方、この武蔵野幕屋にいらつしやっている方は、本当にそのような境地で進んでいきましょう。力が来てしょうがないですよ。

よく、人が私に

「お疲れさま」

と言うと、

「僕は疲れは知らないよ」

と言ってやる。眠くはなるけれども、

「ああ今日は疲れた」

なんてことは思わない。私が91歳だと言うと、みなびつくりして、

「どうしてそんなに元気なんですか？」

と聞く。

「元もとの気が来ているからさ」

と答える。あなた方はまだ相対的にお若いのだから、この福音を聞いたら、もう凄いことになる。どうぞ、一対一の、言わず語らずの伝道をしてください。

「本当の世界はここにあるぞ」

と。何も恐れることはない。本当のことを告白していると、人は動くんです。教えようとしたらダメです。「教」という意識はダメなんだ。教師なんてはダメです、学まな師しならいい、学まなんでいる人間なら。

「一緒に学びましょう」

ということ。

「あなた方に教えてあげましょう」

というのではダメなんだ。

●無即無限無量

それが「見えず」（見非）ということ。「見えず」と言う人が本当に見えてくる。「見える」と思う人は見えなくなる。それはキリストがはつきり言われた。さすがはキリストだね。「我は見ゆ」というのはダメだと。「できる」と思ったらできない。

「¹⁶イエス答えて言い給う『わが教おしえはわが教にあらず、我を遣し給いし者の教なり。¹⁷人もし御意を行わんと欲せば、此の教の神よりか、我が己より語るかを知らん。¹⁸己より語るものは己の栄光をもとむ、己を遣しし者の栄光を求むる者は真まことなり、その中に不義なし。』（ヨハネ7・16～18）」

全くその通りです。キリストは自分が無者であった。キリストは無者ですから、無即、無



無限無量なんです。キリストは、無、即、無、限、無、量、者、です。彼が自分を何ものともしないで神の前に平伏すと、神さまという無限無量なものが入ってくる。だから、無即無限無量と言う。

我々はキリストから無をたまわった。自我がすっ飛ばされると、聖霊のキリストが入ってくる。キリストの聖霊が入ってくる。それが本当のクリスチャンです。そういう確然たるはつきりしたところの根底的な現実を――根源現実と言いますが――そういった根源現実をもたないようなクリスチャンがいっぱいいる。実際、お気の毒さまなんだ。それこそ終いには疲れてしまう、

「信仰はもういい加減にして、もう止めた」

なんて。それは止めるのが本当だ、出直さなくては。

この内容は、これっぽちの方々にお話しているのは本当はもったいない。だから、あなた方は伝えてくださいよ。そこらの教会で聞けるようなお話ではないんだから。私は自分のことを言っているのではないですよ、キリストから圧倒されている現実を言っている。本当は、日本全国を伝道して回りたいくらいだ。あるいは、テレビでいつペンやりたいくらいだ、

「本当の福音はこういうものだ」

ということをね。仕方がないから、詩で書いておくよな。私が向こう側に行ってから、

「ああやつぱりこれは本ものだった」

なんて、後から何十年かたってから初めて分かるくらいなものだ。それで結構だ。大体、本ものは何十年か、何百年かたってから分かる。キルケゴールなんかそうだ、さっぱり初めは分からなかった。

●無の実存

ユゴーの『レ・ミゼラブル』は素晴らしい小説だ。あれは小説というよりか本当の現実だね。なにしろ、私は読みたいものがたくさんあって困る。読みたいものを読むためにも、書きたいものを書くためにも、私は100歳を突破しなければダメだね。まだ91歳だから、あと10年以上。なにも、長く生きたいとは思わない。課題のためには簡単に死ぬわけにはいかないというだけのはなしです。

皆さんも、それぞれ大事な課題を担っていらつしやる方ですから、どうぞ、そういう意味で、キリストに圧倒されながら、いろいろな意味において証し人になってください。とにかく、我々は証し人、証人なんだ。福音の証人としてその姿は、やることは一人一人みなそれぞれで結構です。どれがいいの悪いのということではない。

「我見えず、できず。何も見えません、できません」

という、その「非」の世界を告白せしめられる。そうすると、本当に見えてくる、本当にできるようになる。これはどっちもキリストがしてくださる。キリストが私たちを

「お前は何も見えないぞ」



と、そうすると今度は、

「見えるようにしてやるぞ」

と。全部、これは恩恵なんです。

「我、何事も為し能わず。父がさせているだけだ」

と、キリストは自分でそう言つてらっしゃる。だから、それを「無的実存」という。「実存」という言葉はあまり使わないね。けれども、私は好きだから使う。

無的実存、これが無、即、無限、無量になる。十字架、即、聖霊になる。十字架と聖霊は分けるわけにいかない。無と無限、無量は分けるわけにいかない。無限無量をいただくためには、無をたまわらなければ。みなこれは恩恵ですよ。無も無限無量もどちらも恩恵です。ありがたいでしょうがない。

「そうですか、なかなか無になれません」

なんて。それはなれないよ、なかなか無になんか。なったと思ったら、また有になつてしまふ。相対的な無ではダメです。この無は絶対的な無だから。キリストがそのような絶対的な無者だった。神一切だった。それだから、キリストは絶対的な無に入ったから、彼は無限無量者になった。だから、

「我を見し者は父を見しなり」

と言えた。イエスというひとは大変なひとですよ。その凄い現実を恵みとして私たちは賜る。いいですか、「自分の信仰」とか何とか、そんなものではないですよ、くどく言うけれども。あとは、余韻^{じょうう}々々ということにしましょう。ありがとうございました。

